
とある不幸な幻想殺し

ラリゴリラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある不幸な幻想殺し

【Nコード】

N3538U

【作者名】

ラリゴリラ

【あらすじ】

上条当麻がグレた話です。

上条さんが悪いっていう話

一応原作の一巻と同じ時系列から始まります。
不定期更新です

不幸とシスターが交差する時、その物語は始まる

第一話 上条当麻（前書き）

上条さん（悪）の話です。

原作と同じ時系列で上条さんがグレて悪くなったパラレルワールドです。

文章書くの初めてな上にまだ中3なので、文章が物凄く分かりにくいと思いますが、お付き合い頂けたら幸いですm（|）m

第一話 上条当麻

この物語の主人公は《学園都市》第7学区の道路を車で走行していた。

「浜面、お前マジで凄いぜ!!」

「そんなこと無いって、こんなの皆その気になれば、出きるよ」

「いや、ATMを根元から抜き取るなんて普通出来ねーよ」

「何だよ半蔵、やり方教えてやろーか？」

「やり方教えて貰っても普通出来ねーよ…：そう思うよな駒場さん？」

「確かにそう思うが、それよりアンチスキルが追って来てるぞ」

「ハア？なんでバレたんだ!!」

「コラ〜待つじゃんよ!!」

「ゲッ、あの時の巨乳アンチスキル!!」

「やっぱりリーダーの不幸体質なせいだろ……」

「なっ、俺のせいにするなよ!!」

まあ多分俺のせいだけど……」

「こちら黄泉川、至急応援を要請するじゃん」

「こちらA、その付近にいるので、至急そちらに向かう!」 「こちらB、その付近に「こちらCその「こちらD「こちらE e t c.

「おい!なんかめっちゃ集まって来てるぞ!」

「皆たまたま、この周辺にいたじゃんよ」

「(; | |)」

「(; | |)」

「(; | |)」

「.....」

「これは、間違い無く」

「ああ、間違いなく」

「上条リーダーのせいだな」

「不幸だーーーー!!」

ハアハアハア

アブねーなんとか逃げ切った」

もう自分の寮の近くまで来た少年、上条当麻は仲間が捕まったのに喜んでいた。

結局あの後、「不幸の原因のリーダーが出でいけば、俺らは捕まら

ない！」という身勝手な理由で車を追い出され、一人逃げて来たのだ。

でも、あいつら捕まってたよなあ」

ま、いっかアンチスキルのリーダーの俺を追い出した罰が当たったんだろー。

しかし、まさか逃げ切れるとは思っても見なかったので、少し驚いていた。

筋金入りの不幸体質の俺に、幸運が降り注ぐなんてありえないんだよなあ

理由は多分

きつとこの後、飛びきり不幸な事が起こるんだ！！

「不幸だーーーーー」

と言って寮に走り帰った。

寮に帰ったらアンチスキルが待ち伏せてるかと思いきや、そんなこと無かったので少し安心して、部屋でまどろんでいた。

ガシャーーン

ベランダの方から凄いい音がしたので、嫌な予感がしたがほっとくわけにもいかなかったのでベランダの方に向かう。

そしたら何故か布団が干してあった。

「おなかへった」

予想は当たり隕石級の不幸が舞い降りた

第一話 上条当麻（後書き）

上条さんはアンチスキルのリーダーっていう設定です。
駒場は副リーダーです。

稚拙な文章にお付き合い頂きありがとうございます。

まだ続きがあるのでそっちも見て頂けたら幸いです。

第二話 布団登場（前書き）

第二話目です。

原作とはちよつと違います。

第二話 布団登場

「おなかへった」

最悪だ……こういうに関わると絶対不幸に成ると俺の不幸センサーが言ってる…

「ご飯くれると嬉しいな」

「布団にあげる飯はねーよ！」と言ってドアを閉めた。

うん。大丈夫だろ、きつとどっかのヒーロー様が助けに来てくれる。うん。

「分かったんだよ、あなたに迷惑かけるわけにもいかないし出て行くんだよ。」

「分かったよ！飯だけだからな！」

ここで見捨てたら絶対もっと不幸になる気がする……

「ほら、飯だよ」

「ありがとうなんだよ」

「まあ、昨日の残りだけだな」

まあ、俺は浜面達と一緒にATM盗ったりしてるから金は有るし別に飯位良いか。

「バグバグバグバグ」

しかし、食うのはえーな、本当にシスターなのかよ……

「ありがとうなんだよ！」

「食うの速ッッ！！」

「魔術結社に追われてる所助けてくれてありがとうなんだよ」

「魔術結社あ？ああ電波ちゃんか」

「電波ってどうゆう事なのかな？魔術は本当にあるんだよ」

「ああ、はいはい分かった分かった、じゃあ飯も食ったしとつとつと出てけよ。それとも俺も魔術結社とやらに巻き込む気か？」

「地獄の底までついてきてくれる？それなら巻き込むよ」

「……着いてく訳ねーだろ」

「分かったんだよ、ご飯ありがとう。バイバイ」

第二話 布団登場（後書き）

上条さんが悪いと、殆ど関わろうとしないで追い出しそうだなあと
思い歩く教会は壊しませんでした。

後、ギャグも入れた方が良いのかな？

ギャグも入れた方が良いと思うなら言って下さい m () m

第三話 ビリビリ登場（前書き）

御坂美琴登場

第三話 ビリビリ登場

あの魔術結社がどうか言うシスターが帽子？を置いていったから
玄関の外に置きに置いてたら

ブブブブと携帯にメールが来たので見てみたらそれは友人の浜面
からだった。

差出人…浜面

本文

上条リーダー、ATMの金の事で話が有るから明日いつもの場所で
集会を開いてくれないか？

返信…浜面

本文

ああ別に良いがそれよりお前ら逃げ切れたのか？

差出人…浜面

本文

ああなんとかなったよ
じゃあ明日7時にいつもの場所で集会で良いんだよね？

返信…浜面

本文

それでOK

浜面とのメールが終わったら急に腹が減ってきたので、近くのコンビニに弁当を買いに行く事にした。

暫く歩いてると女子中学生が5、6人くらいのスキルアウトに絡まれている。

しかもそのスキルアウト達は自分のグループのスキルアウト達だった。

そしてリーダーである上条と副リーダーである駒場は女子に手を出す事を禁止していた。

「おい、てめえら何やってんだよ。」

「あつ、上条リーダー!!」

「上条リーダーに見つかるとかヤバくね?」

「確かにヤバイぜ……どうする?」

「てめえらこそ話を聞いて無いですか?」

「すみません……この女をナンパしました。」

「てめえら、俺達のルール知らねえ訳ねーよな？」

「はい、すいませんでした」ドゲザ

「今更謝ったっておせえよ、だいたいこんなガキのどこが良いんだ？」

ビリビリビリという爆音がなってその後、ナンパされてた女の子がいきなり叫んだ

「さっきから黙ってれば何なのよ！！ガキってアンタなんか言われる筋合い無いわよ！！！！」

「おい何だこのガキ高位能力者だったのか！」

「さっきまで、ナンパしてたくせにガキって言うな！」

ビリビリビリ！！！！という音がしたかと思えばスキルアウトが全員倒れていた。

ただし上条を除いて

「うお、なんだよいきなり放電とかピカチュウですか？」

こいつ全員正確に気絶させやがった。それに、常盤台の制服来てるし、多分第三位のレールガンだな。

「で、何でアンタには効いて無いの！？？」

今私の電撃を打ち消された！！！！？？

「まあ良いや、俺の部下を気絶させといてただで帰れると思うなよ」

「望む所よ！！」

こいつに能力が効かなかった理由を暴いてやるわよ！

第三話 ビリビリ登場（後書き）

御坂大好きな人は次回見ない方が良いかもです。

第四話 幻想殺しVS超電磁砲（前書き）

一応言っておきますが

上条さんはガチで闘います

第四話 幻想殺しVS超電磁砲

「第三位様が無能力者に負ける訳ねーよな!？」最初に動いたのは上条だった。

すでに距離は5mも無い。

そこにダッシュで距離を詰め一発を食らわせようと思ったのだ。しかし

「なめんじゃないわよ!!！」

美琴も雷撃を放って上条を牽制する。

しかし、牽制のための真っ直ぐ飛んだだけの雷など、上条に効くわけが無い。

キュイイインと打ち消されてしまう。

「なっ!!!？」

美琴が驚いたすきに距離を詰め、

美琴の脇腹に容赦なくフックを叩き込む。

「ガハアッ!!！」

美琴は体中の酸素が抜けて苦しむ

そこに上条のストレートが顔にヒットして、美琴は3mほど吹き飛ぶ
しかし、美琴は立ち上がった

第三位として闘いなれているのも有るが、それより、無能力者に負けたく無いというプライドがあった
そして距離をとりながら上条を睨み付ける

「何だよ？その目は？」

「まさか俺がお前の事殴ら無いとでも思ったか？」

「俺はヒーローじゃ無いんだから誰でも殴るに決まってるだろ？」

「俺はヒーローじゃ無くて、ただのスキルアウトのリーダーなんだぜ？」

そこに元ヒーローの面影は無かった

「別に殴られ無いなんて思って無いわよ」

「そうか、なら別に良い」

「もうあんたには手加減無しよ！！」

「くらええええええ」

そう言ってコインを取り出しレールガンを放つ

しかし、上条はいとも簡単にそれを打ち消す

「なっ！！！！！！！！？」

自分の切り札である超電磁砲まで打ち消されるとは思わなかった

「何なのよそれどんな能力なのよ！！？」

「一応言っておくが俺は無能力者だぜ？」

「嘘よ！！！！！」

「まあしいて言うなら」

「お前の幻想をブチ殺す能力かな？」

「ハア？」

「ほら、お前の無能力者に負ける訳無いっていう幻想がブチ殺されただろ？」

「そんな事無い！！あんたも立派な能力しゃじゃない！！？」

「へえ？まだそんな幻想を抱いてたのかあ」

「じゃあまずはその幻想をブチころしてやんないとな？」

「来るなあああ！！！」

と言って雷撃を飛ばすがいとも簡単に打ち消される

「まずはその」

「ふざけた幻想を」

「ブチ殺す!!!!!!!!!!」

第五話 布団再び

超電磁砲をボコボコにしてからコンビニに寄り弁当買い家に帰る

なんだか意外と弱かったなあ超電磁砲

これならあの作戦も案外簡単かもな？

などと考えながら寮の階段を登る

そして自分の部屋の階に着いた時前方に見えたのは名前も知らないあのシスター？だった

「あっ、あなたの部屋に帽子落としたかもって思って来てみたの！
」

「廊下にそのまま置いとくなんて酷いかも！」

「チッ、関わりたく無いのにあっちまったぜ」

「なっ、その言い草は酷いかも！！」

「ハイハイ。で、魔術結社？とか言うのはもういいの？電波卒業？」

「私は電波じゃないかも……魔術結社は本当にあるんだよ？」

「ハイハイ。もしも本当に魔術結社が有るなら魔術も有るんだよな？
？だったらやってみろよ」

「私には魔力が無いから出来ないんだよ……」

その言葉に上条は大爆笑する

「ハッハッハ、ずいぶん都合の良い設定だなあ？」

「でも、私が着てるこの歩く教会はどんな攻撃も効かないんだよ？」

「それが本当なら殴って見ても良いか？」

「別にいいよ」

「行っておくが俺の右手は特殊でな、異能の力ならなんでも打ち消すんだぜ？」

「そっちこそ嘘ついてるかも！！そんな魔術聞いた事無いかも！！」

「ハア？なめてンのか？」

そう言つて上条はシスターの胸ぐらを右手で掴む。そしたらパキインと音がしたら目の前に素っ裸の少女が立っていた

「え？あれ？……キャーーーーー」

そして上条の右手にはさっきまでその少女が来ていた服が握られていた。

そしてはたからみたら上条がその少女の服をひっ剥がした風に見える
さらに上条の不幸は続き

「ワォ」

級友の土御門に見られていた

「不幸だーーーーー」

と言って少女を部屋の中に入れた

「まさか本当だったとは……」

「なんで謝罪も無いのかな？」

「いや、お前の裸なんて一円の価値も無いから。それより土御門に……」

「っっていうか不幸だーって言ってたよね？」

「ああ」

「私の裸見ておいて不幸だーはさすがに酷いかも……」

「いやでも事実だし」

「真顔で言うなんて酷すぎるかも……」

その後、お互いに自己紹介をし、事情を説明して今日一晩だけ止めるという事で落ちついた

第六話 集会（前書き）

昨日更新出来なくて本当にすいませんでしたm
ちよっといろいろと有りまして……………

でも今回はちよつと長めです。

後、今回から結構オリジナル展開です。

それではよろしく願いますo（^ー^）o

第六話 集会

次の日の朝以外と早く目が覚めた

「何だよシスターまだ寝てるし……」

「起きてるんだよ!」

「お前今日どうすんの?」

「私は出でいくよ」

「そうなのか?」

「うん。貴方を巻き込むわけにはいかないし……」

「……」

「じゃあバイバイ何だよ! 昨日はありがとう!」そう言って玄関に向かう

「……」

「じゃあバイバイ!!」

「……別に匿ってやっても良いぜ?」

「前にも聞いたけど……」

「地獄の底までついてきてくれる？」

凄い気迫に少し考えた後、こう言った

「無理だ！」

「そうだよね……じゃあバイバイ何だよ！！」

「ああ」

そう言って二度寝を開始した

「はあ、もう七時か……」

今日の七時はスキルアウトの集会だった

浜面とのメールではATMについての話って事になっているが、実際は別の事だ

何でATMの事にしたかと言うと、絶対にその計画はバレてはいけないからだ

いよいよ明日かあ。なんて思いながら家を出る

暫く歩いて集会が有る場所に着くと皆揃っていた

「チィ〜ス上条リーダー」等とそれぞれ挨拶をする

「じゃあ上条始めてくれ」と駒場が言う

「分かった」

「皆、分かってると思うがあの計画は明日だ」

「皆にはアンチスキルの足止めなどをしてもらおう」

「そして……明日の計画には俺たちの悲願である無能力者への差別が無くなるきっかけになるかもしれない!!」

「皆……その為にあの計画を潰そう……」

「絶対能力者育成計画を……！」

「才才才才」

とその場に居た全員が大声を出した

「さあ、もう一度実験の内容をおさらいするぞ」

「まずは一方通行が超電磁砲のクローンと実験を行なっている所に割り込む」

「そして俺と一方通行が戦ってる所をネットに生中継で流す」

「そして恐らく来るであろうアンチスキルを皆が足止め」

「という事だ」

「さて質問は？」

「ハイ!!」

「何だ？」

「この実験ってツリーダイヤグラムで演算したんですよね？」

「そうだが？」

「だったら上条さんが一方通行に買っても再びツリーダイヤグラムで演算して、異常無しって結果が出たら意味無く無いですか？」

「だからこの実験を明るみに出して実験を凍結させるんだよ」

「さすが大量に知られた非道徳な実験を続ける事は出来ないだろう？」

「その為にテレビ局をハッキングする準備を整えてきたんだ」

「しかもこの計画は俺が勝っても負けても計画は凍結する」

「勝ったら無能力者に希望を能力者に絶望を」

「負けたら無能力者に絶望を能力者に絶望をだ」

「だから当然勝ちたい」

「それに勝算は有る」

「まず、第一に俺はハードテーピングを巻く。そして一方通行は能力に頼ってるせいで虚弱だ」

「俺の強化されたパンチが入れば一発で倒せる」

「とまあこんな感じか？」

「じゃあ今日ひとまず解散だ！！」

そう言って帰る

そして寮が見えてきた時電話がかかってきた

浜面からだった

「何だ？」

『リーダー、ハードテピング忘れてってるぜ？』

「マジかよ!!！」

『マジだよ。どうする？今から届けに行く？』

「ああ頼む」

と言って電源を切る

やっちゃったなあと思いながら寮の階段を登るとインデックスとか言うシスターが清掃ロボットに群がっていた

「何だ？何でここで寝てんだ？」

そう言って近づいてみると背中をバツサリ斬られていた

「なっ!!!？」

「やあ、その子を回収しに来たよ？」

そして目の前にはバーコードを目の下に張り付けた赤髪神父が居た

第七話 バーコード神父

「誰だてめえ!!!」

そう言って目の前にいる神父に殴りかかる

多分今の口ぶりからして、恐らくインデックスの背中を切ったのはこいつかこいつの仲間だろう

さすがに目の前で知りあいが血まみれにされててムカつかない上条ではない

「誰って?」

「魔術師だけど」

「やっぱりおめえがそうか……」

「歩く教会が壊れてるって知らなくてこんなに深手を負わせてしまった」

まあ僕じゃないけどね。と付け加える

「じゃあ歩く教会? が壊れなければこいつは」

「ダメージは受けなかっただろうね」

その言葉に絶望した……

「やっぱり俺は疫病神だ……救いたい人は救えず人にも不幸を押し付けてる」

「何言ってるのか分からないんだが……」

「独り言だよ……」

「そうか……ではその子を回収させて貰うよ」

「インデックスは渡さねえ!! インデックスはお前から逃げたんだからな」

「てめえをブチ殺してインデックスを救う!!」

「それは非現実的だな」

「その傷は凄い医者でも治せるものではない……」

「僕たちの魔術が無いとね」

「傷つけたてめえに渡すわけねえだろ!! 何様だ!!」

「だから傷つけたのは僕じゃないんだけどね…」

「まあいい、僕の名前はステイルⅡマグヌスと名乗りたい所だけど、ここはFortis931と言っておこうかな」

「分からないのかい？」

ハアとわざとらしく溜め息をついた後、ニヤニヤしながら言う

「魔法名だよ、もっとも本当の意味は殺し名…だよ」

第八話 幻想殺しVS魔女狩りの女王（前書き）

今回はあのチンピラが本編に巻き込まれます

一応言っておきますと

この上条さんは原作より喧嘩も強いし頭の回転も早いです……

それも物凄く……

第八話 幻想殺しVS魔女狩りの女王

「意味分かんねえよ!!」

そう言ってステイルと距離を縮める

しかし、ステイルが名にかを詠唱したら、炎剣が生まれる

「バカ正直に突っ込んで来るなんて……死にたいのかい？」

客観的に見たら丸腰で炎剣を持っている相手に突っ込んでいる上条をバカだと思うのかも知れない

しかし、上条は丸腰では無く、幻想殺しという武器を持っていた

「死になよ!!」

そう言って上条に炎剣を降り下ろす

しかし、上条はいとも簡単に炎剣を打ち消す

「なっ!!!!!!?!!?」

「やっぱり効いてくれたか……良かったーインデックスの服消せたんだから当然か……」

もうお互いの距離は無い

「さあ、これでも喰らえ!!」

そう言ってステイルに渾身のアッパーを喰らわせる

「ガハア!!」

ステイルは気絶した

「弱っ!!」

あんなにクールに登場したのに弱くて驚いた

しかし

「誰が弱いつて？」

気絶してなかった

「あれ？確かに気絶してただろ？」

「まあちょっとだけね…」

「何で目が覚めたんだ？」

「それだけ、僕の覚悟が思いからさ」

「白目剥いてたけどな」

「うるさい!!」

「もう怒ったぞ！」

「魔女狩りの女王……！！（イノケンティウス）」

ステイルがそう言う

でっかい巨人みたいなのが出てきた

「おお、凄いな」

「信じたくないが……君は魔法を打ち消せるみたいだからね……それの対策さ」

「ふーん、そうか」

そう言ってイノケンティウスを右手で打ち消す

しかし、すぐに復活する

「へえ？確かにこれは相性が悪い……けどな、俺はお前なんかに負けないぜ？」

そう言って上条はイノケンティウスの腹らへんを薙ぐように打ち消す
そして、復活するよる先に左手で持っていた拳銃でステイルを撃つ

「なっ!!!?」

そう言って倒れる

「魔術師ってのも腹撃たれば倒れるんだなあ？」

そう言って顔を蹴りとばす

「ガハッ!!」

「イノケンティウスを見た直後にあそこまで、作戦を思いつくとは
正直凄いな……………」

「だか負ける訳にはいかない!!」

そう言って拳銃で撃たれた場所を燃やして止血する

「第二回戦の始まりってか!!!?」

「ハア、リーダーも人使いあらいなあ」

浜面は上条の寮にハードテーピングを届けるために向かっていた

それにしても作戦は明日か……

上条リーダー一方通行に勝てるかな？

まあリーダーが負ける所なんて想像できないけど……

浜面は今まで上条が喧嘩で押されてる所など見た事が無かった

確かに上条の右手は特殊だし、不幸に巻き込まれて強くなったってのは分かる

しかし、それにしたって強すぎる

異常と言って良い程強い

強さの秘密をいつか知りたいなあ

そんな事を考えながら歩いていると上条の寮に着いた

ハア、やっとなんて思っていたが、すぐに異変に気付く

「何か赤くね？　ってか燃えてね？」

「……………」

あれはさすがにやばくね？

少し迷ったが浜面は寮に向かって走り出した

第九話 ルーン（前書き）

遅れてすみません…

第九話 ルーン

「いくぜえ!!」

そう言って上条はステイルにダッシュしながら銃を撃つ

しかし、ステイルは魔女狩りの女王を巧く使い銃弾を防ぎ炎で牽制をする

「ちょこまかどうぜえんだよ!!」

さっきまで圧倒的に押していた上条が攻めきれないのはステイルが上条を強敵と判断し防御に徹しているからである

クソッ、あの巨人が邪魔くさくてなかなか距離が縮まらねえ……
さっきみたいに銃で不意打ちって手も使えねえ……
さあて、どうしようかな？

そんな事を考えながらも上条の動きは微塵も鈍らない

「ちょこまか逃げてねえで、攻撃してきたらどうだあ？バーコード
!!」

「フンッ、そんな安い挑発に乗ると思うのかい!？」
そう言ってまた距離をとる

向こうは持久戦に持ち込む気だな……仲間でも読んだか？

ってか俺魔術についてなんも知らないんだよな…異能の力で有る事以外…

ちよっと探りを入れるか…

「さっきからちよこまか逃げてっけど、魔術ってのはMP切れとか無いのかよ!？」

「君に教えるつもりは無い!」

「魔術ってのはその辺な紙を使ってやるのか？」

「フンッこれは紙じゃ無くて、ルーンって言うんだよ。まあこんな極東の島国の高校生ごときじゃ分からないと思うけどね」

「イギリスも島国だし、日本より遅れてるだろ…」

「なっ!!イギリスをバカにしたなっ!!」

「イノケンティウスやれ!!!」

安い挑発に乗ってきたな…

バカなんだろうか…

そんな事を思いつつ、魔女狩りの女王を打ち消し、復活するまでの少しの間にツツコム気だった。

しかし、何故か魔女狩りの女王の動きが鈍く、再生速度も遅かった。

「何故だ？どうしたんだ？イノケンティウス！？」

三分前、上条の寮にて

なんで上条リーダーの寮が何で火事になってんだ……？
スキルアウトの少年浜面仕上はそんな事を考えていた

多分リーダーの不幸体質のせいだろうな……と思いながら上条の階
まで向かっていた。

「んっ？なんだこれ…紙？なんか超怪しい記号が書いてある…」
そう言って壁に貼ってある紙を手取る

何だろうな？と思いながら少し進むと

「また有る……」
そして剥がす

そして、上条の階に着くまでに結構な数のルーンを剥がしていた

「何やってんだよ！？上条リーダー！！」

目の前には訳の分からない光景が広がっていた

「チイツ、タイミング悪いな浜面…」

魔女狩りの女王が弱まっていたので、チャンスと見た上条は一気に畳み掛けようとしていた時に浜面は来た

「イノケンティウスがおかしいと思ったら、お前が剥がしてたのか！！」

そう言って浜面に炎剣を降り下ろす

しかし浜面はギリギリの所で炎剣をかわす

「クッ！！」

「全く意味が分からないんだけど！！」

そして、浜面はステイルを倒す策を見つける

「浜面！！暫くソイツの相手してあげてくれ！」

「いや、ちよっ、無理だって！！！！」

そう言ってもステイルは浜面に斬りかかる

上条はインデックスを抱えて走り出したので、チャンスと見た上条は一気に畳み掛けようとしていた時に浜面は来た

「イノケンティウスがおかしいと思ったら、お前がルーンを剥がしてたのか！！」

そう言って浜面に炎剣を降り下ろす

しかし浜面はギリギリの所で炎剣をかわす

「クッ!!」

「全く意味が分からないんだけど!!」

そして、浜面はステイルを倒す策を見つける

「浜面!! 暫くソイツの相手してあげてくれ!」

「いや、ちょっ、無理だって!!」

そう言ってもステイルは浜面に斬りかかる

上条はインデックスを抱えて走り出した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3538u/>

とある不幸な幻想殺し

2011年10月9日10時24分発行